『江戸川大学紀要』第 33 号（2023 年 3 月）pp. 281-289

ホストのホスピタリティが短期海外研修に与える影響

── 研修参加学生の意識調査結果から ──

林　香織*・崎本　武志**・土屋　薫***・新井　正彦****

要　約

本研究は，これまで漠然と「ホームステイは留学の効果が高い」と捉えられてきていることに着目し，本学短期海外研修の参加学生への研修前後に実施した質問紙調査の結果から，参加学生とホストファミリーとの関係性の確認及び，その関係性が異文化理解に与える影響について把握することを目的とする。

学生が自己評価ベースではあるものの，先行研究同様，「語学力」については消極的な評価となっており，短期的な研修では語学力向上までは期待できない。一方，研修前後での能力評価に統計的有意差が見られたのは「コミュニケーション能力」「異文化理解」であり，成長を実感できるという点で，研修の効果として位置付けることができる。また研修後には，「国土が広い」，「幸福度が高い」，「自然が豊か」，「人々が優しい」，「歴史的に興味深い」の 5 項目のイメージに顕著な変化が見られ，総じて良い方向にシフトしていることから，短期間でも研修先に対するポジティブなイメージが形成されることを明らかにした。ホストとの関係性として，やや期待通りではないものの，大きな不満にはつながっていない。むしろ重要なのは，「（ホストに）適度に放っておいてもらった」と感じられることにあり，ホスピタリティ概念に見られる主人と客人の対等な関係を前提とするそうした「主客同一関係」が成り立ち，実際に当該国・地域の人々が優しいというイメージが形成されることが見出された。

キーワード：ホストファミリー，ホスピタリティ，主客同一，ニュージーランド，オーストラリア

はじめに

本学は 1990 年の開学以来，海外研修を実施しており，2019 年度までに 6,000 人以上の学生がニュージーランドに渡航するなど実績を有している。Covid-19 の影響により 2020，2021 年度の 2 年間は実施できなかったものの，学生からの要望もあり，2022 年度 8 月に海外研修を再開することとなった。

2022 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授
コミュニケーション学 メディアコミュニケーション論
** 江戸川大学 現代社会学科教授　観光ホスピタリティ論
*** 江戸川大学 現代社会学科教授　レジャー社会学
レジャー産業論
**** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授
地域研究（オセアニア）

研修の目的は，語学研修と異文化体験にあり，現地ではホームステイ滞在を基本とし，提携大学の語学研修と選択的アクティビティの実施により，その国の文化に触れられるようにプログラムが構築されている。研修後に学生達が提出するレポートを見ると，そのほとんどにホストファミリーへの不安が感謝へと変わった体験が綴られている。例えば，「初めての海外にホームステイで最初は不安と緊張しかありませんでした。空港に着いて初めてホストファミリーに会ったとき私はとても緊張していました。ですが，ホストファミリーは笑顔で握手をしてくれました。私のホストファミリーはおばあちゃんのホストマザーで，ホームスティはホストマザーと私の二人暮らしの 2 週間でした。（中略）ニュージーランドのたくさんの文化を学べて，たくさんホストファミリーと話せて仲良くなれて，2 週間があっという間に

すぎ毎日がとても楽しかったです。そしてなによりとてもいい経験になりました。」[(1)]（社会学部経営社会学科 T. R. さん／2019 年参加）などが挙げられる。

これまで感覚的に，ホストファミリーとの生活や体験が，語学の上達や異文化理解に大きな影響を与え，効果的なことだと捉えられきた。しかし，ホストとの何が最も影響を与えているのかに着目して検証したことはなく，漠然とホームステイは効果が高いと考えられてきた。そこで本研究では，研修を通じ，参加学生とホストファミリーとの関係性の確認及び，その関係性が異文化理解に結びついているのかどうかを，質問紙調査を用いて把握することを目的とする。

1. 研究背景と先行研究の整理

大学の海外研修におけるプログラムをシラバスベースで検討すると，各大学により目的も様々で，①語学力向上を目指すことを目的とした語学研修，②大学での専門性を高めるべく海外先進地域や海外での体験を通じた学修の場が提供される専門研修，③異文化理解や体験そのものを目的とし，コミュニケーション能力の向上，多様性を受け入れる価値観を醸成しようとする異文化理解研修の大きく 3 つに大別することができる。もっとも，語学向上と異文化理解の双方を目的に掲げるプログラムも見受けられる。また研修期間も 1～3 週間程度に設定されており，短期的なものを「海外研修」と指す場合が多い。そのため，本稿で扱う「海外研修」は短期的なものに限ることとする。

本学におけるプログラムは「異文化理解研修」（New Zealand ／ Massey University：研修期間は 2 週間），「語学研修（オセアニア）」（Austraria ／ Griffith University：研修期間は 4 週間），「語学研修（欧米）（United States of America ／ University of Hawaii at Manoa：研修期間は 3 週間）などが準備されているが，「語学研修」では渡航前後に TOEIC テストの受験を義務付け，「異文化理解研修」との差を明確にし，学生が自分の目指す学修の方向性に従い，プログラムを選択できる。

このような研修の効果について，「短期研修では英語力養成面では厳しい現実があるが，海外研修は単に語学力養成だけが目的ではなく，異文化での生活体験を通して学生が多様な考え方や異なるものへの寛容性などを身につける機会を提供するという面があることに研修の意義をより見いだす必要がある」（上田，2021）という指摘がある。本学のように専門的に英語を学んでいるわけではない学生について，松田は短期海外研修の成果として「英語への関心を高めるモチベーションになっている」（松田，2012）ことを見出しているものの，それがその後の英語学習に効果的なものかは読み解くことができない。多くの先行研究で示されているのは，英語学修への興味の高まり，ホームステイによるコミュニケーション能力の向上，異文化に対する多様な価値観の醸成や受け入れを指摘しているが，それを「研修記録」から導き出す研究が多く，研修前後に質問紙調査を行って明らかにする方向性の研究はかなり少ない。

研修の効果を語学力以外の何に見出すかについては，専門的な研修の成果に知見を求めたい。専門研修として実施された看護学科の学生に対する研修報告書の分析から，日高は，①語学への意欲，②日豪看護の比較，③看護観への影響，④異文化体験，⑤海外志向の 5 つに学びをまとめることができると指摘している（日高，2017）。専門性の高い研修の場合，研修先の国や地域との比較により，気づきを得ることが指摘されており，他国の看護の現場を見ることが，日本での学修意欲向上につながるという（同掲）。その他の学問領域でも，現場見学や体験は重視されており，森越は「学生の興味・関心がある分野の研修やサイトビジットを計画する必要」性，「企業訪問の目的・目標の明確」化などを挙げている（森越・白鳥，2016）。確かに，専門研修の場合は，学生の関心に併せた現地企業の訪問や見学が刺激となることは容易に想像がつく。ただ，本学のように 1 群の教養科目としての位置づけである場合は，学生の興味関心は多岐にわたるため，専門性に偏り

が生じるプログラムを作成することが難しい。

そこで本学の研修の効果として最も期待できるのは，ホームステイによる効果だと考えられる。後藤田は，学生が研修後に提出する振り返りである「研修成果レポート」の分析から，15 日間の英語・異文化コミュニケーション力の向上を目的とした研修の効果について，「ホームステイによる生活体験を通して文化の違いやアメリカ人のホスピタリティについて深く洞察」していること指摘している。確かに本学学生の研修後レポートにも，生活を共にすることで，コミュニケーションすること，伝えようとする気持ちこそが重要なのだという気づきを得るケースが散見される。海外研修だけでなく，鹿浦は，ホームステイの効果を，日本で学ぶ留学生への調査から「寮やアパートで暮らす留学生より，ホームステイの留学生の方が常にいい成績をとっている」ことを明らかにしている（鹿浦，2008）。生活を共にすることが意欲を含め，学修全般に良い効果をもたらしているとみることができるが，ではなぜホームステイが効果的なのかは解明されていない。

ここでいうホスピタリティとは，一般的な用語としての「もてなし」などに当たると考えられるが，服部は，ホスピタリティ（hospitality）の語源である hospes の考察から「主客同一（主人と客人が同一の立場に立って，互いに遇する）の精神をもって相互満足しうる対等となるにふさわしい共創的相関関係で互いに遇すること」と概念整理を行っている（服部，2008）。ホームステイを体験する学生とそれを迎えるホストの関係性は，奉仕される／するという「サービス」とは異なるように思われる。お互いに抱えている文化的背景や，生活習慣が異なり，摩擦が起きることもあるが，もてなされる側ともてなす側として，対等な関係性になるべく互いに思いやりの気持ちが必要になると考えられる。学術的に「ホスピタリティ・マネジメント」にこれらの知見を求めることができるものの，当該領域で海外研修におけるホストファミリーと学生の関係性を明らかにしようとする研究は未だ見られない。

こうした先行研究と研究背景から，本研究チームは調査の目的を以下のように設定した。

1，研修の効果（自己評価）の把握

2，研修参加国・地域に対するイメージの研修参加前後における変遷の把握

3，参加学生が持つホストへの期待値と実態

2. 調査概要

先行研究を踏まえ，質問紙を作成し，参加学生へのアンケート調査を行った。

2. 1　調査対象者，調査方法

a. 調査対象母集団：37（「異文化理解研修」「語学研修（オセアニア）」「語学研修（欧米）」の履修学生

b. 標本数：有効回答数　（研修前）31 件（研修後）34 件

c. 調査時期：（研修前）2022. 8. 24　（研修後）2022. 9. 28

d. 調査方法：Google foam を用いた自己記入式アンケート調査

e. 回収率：（研修前）83.8％（研修後）91.9％

f. その他：本稿では研修前後を対応のあるデータとして扱うため，前後の双方を回答した 29 件分のみ分析に利用した。

2. 2　質問事項

研修に参加した理由，現在の自分の位置づけ（社会人基礎力）を自己評価，研修参加国・地域を想起する単語の書き出し（自由記述），研修参加国・地域に対するイメージ，ホストに対する期待／ホストへの満足度，不安に思っていること／困ったこと（自由記述），次年度生へのアドバイス（自由記述）

3. 調査結果

まず，回答者の属性を確認していく。

本分析に用いる 29 件のデータについて，学科・学年は図 1・2 に示した。Covid-19 の影響で海外渡航を伴う研修を 2020・2021 年度と実施し

なかったため3・4年生が若干名参加している。また研修先は，ニュージーランドが最も多く16名であり，オーストラリア7名，ハワイ6名である（図3）。

図4は研修に参加した理由として最も高いのは，「語学力を高めたい」の65.5%，「ホームステイしたい」55.2%，「研修内容がためになる」51.7%が続く。研修前後を比較したところ，研修後に下がった項目は「語学力を高めたい」（−6.9ポイント）と「研修内容がためになる」（−3.4ポイント）で，上がった項目は「研修先に興味がある」（+3.5），「ホームステイしたい」（+3.4）となっていた。増減は，満足度や効果と比例していると考えられるため，先行研究と照らし合わせても，やはり短期では語学力を高めるところまでいきついておらず，むしろ研修先への興味やホームステイといった文化交流について，参加学生は効果を感じている現れとしてみることができる。なお，これらの結果に研修先による統計的有意差は確認されなかった。

次に，経済産業省が提示する「社会人基礎力」および，本学のディプロマポリシーを考慮し，「コミュニケーション能力」「チームワーク力」「語学力」「情報リテラシー」「ICTリテラシー」

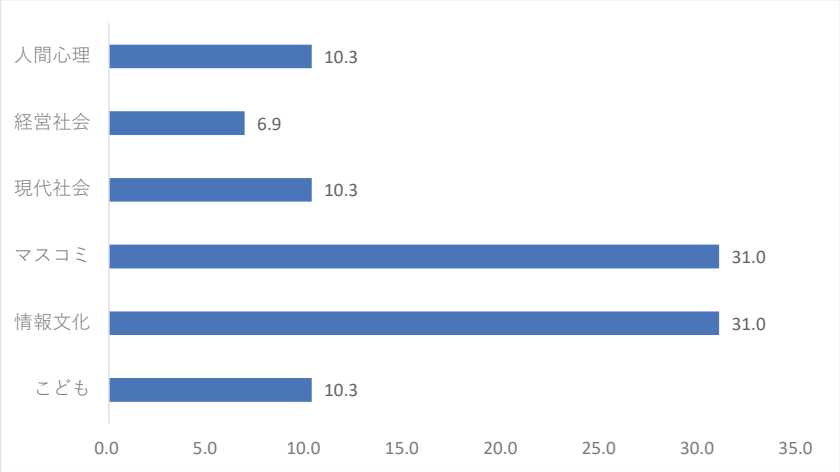

図1　学科（%）n=29

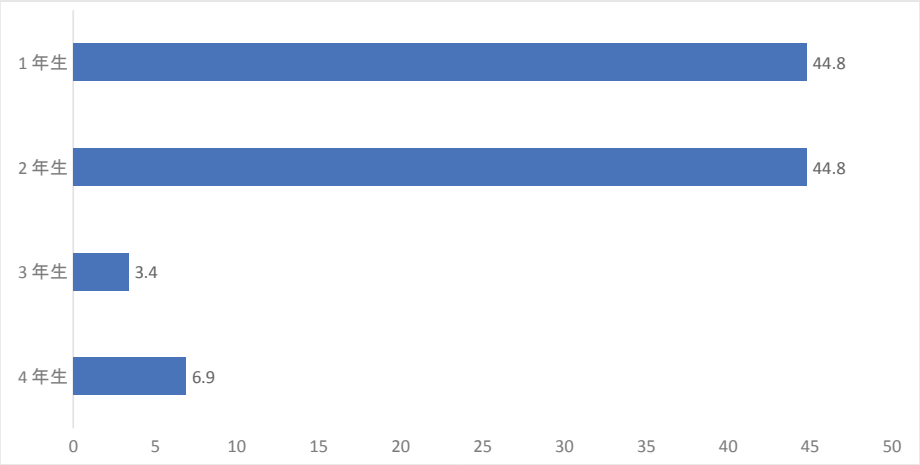

図2　学年（%）n=29

「異文化理解」の6つの能力を選定し，研修前と研修後に，自分にはどれくらい当該能力が備わっているのかを，「非常にある」から「全くない」の5段階で尋ねた。なお図5は，各回答を5点満点で得点化し，回答数の平均得点で研修前後を比較したものとなる。また表1には，サンプル数が30件以下のためWilcoxonの符号付順位和検定を行い，検定結果をp値として示した（網掛け部分は$p < .05$）。

「語学力」以外の項目は上昇しており，特に「コミュニケーション能力」（平均点＋0.45）と「異文化理解」（平均点＋0.72）は，その他の項目に比べて伸びが大きい。研修の満足度を問う設問ではないものの，慣れない環境に身を置くことで「コミュニケーション能力」や「異文化理解」の能力向上，成長を実感できるという点で，これらは研修の効果として位置付けることができる。一方で，先行研究で指摘されたのと同様，「語学力」についてはあまり実感がなく，検定では有意な差はないものの，平均点で0.13ポイントほど下落している。思っていたよりも現地で自分の語学は使えないと認識した結果が現れたとみることができる。しかし，これを帰国後の学修意欲に繋げることができれば，研修の効果は中長期的に望めるため，帰国後も継続的に語学力を高める学修プログラムを実施していくことが重要である。

異文化理解について詳細に分析するため，研修先の国や地域に関する印象と考えられる11項目を選定し，「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で評価してもらい，得点化

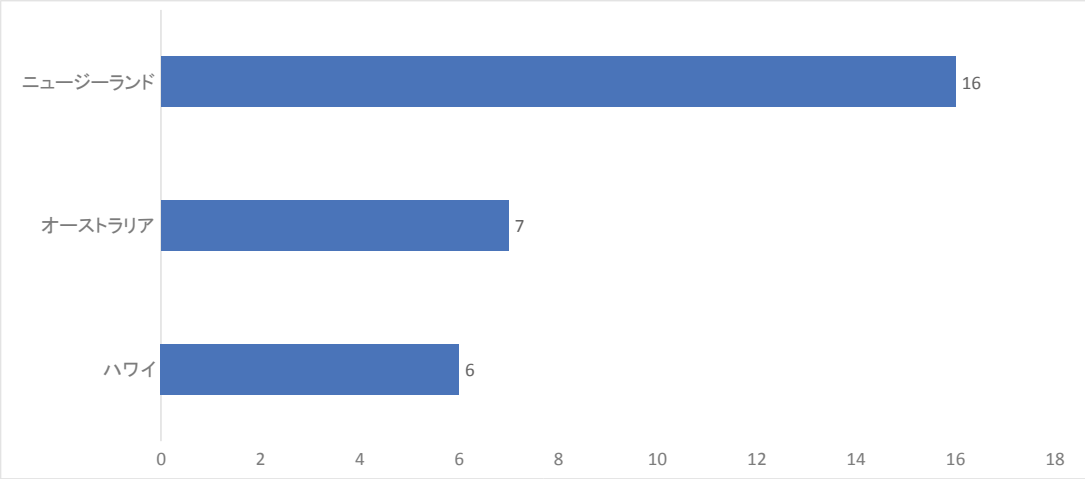

図3　研修先（人数）n=29

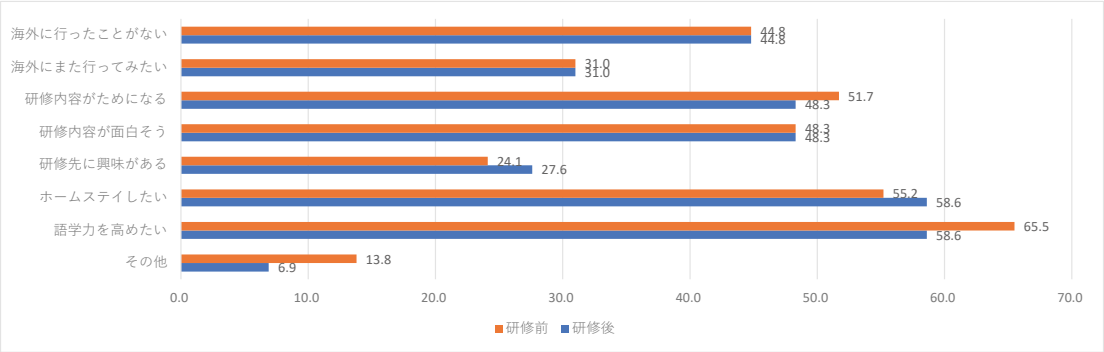

図4　参加理由（%）n=29

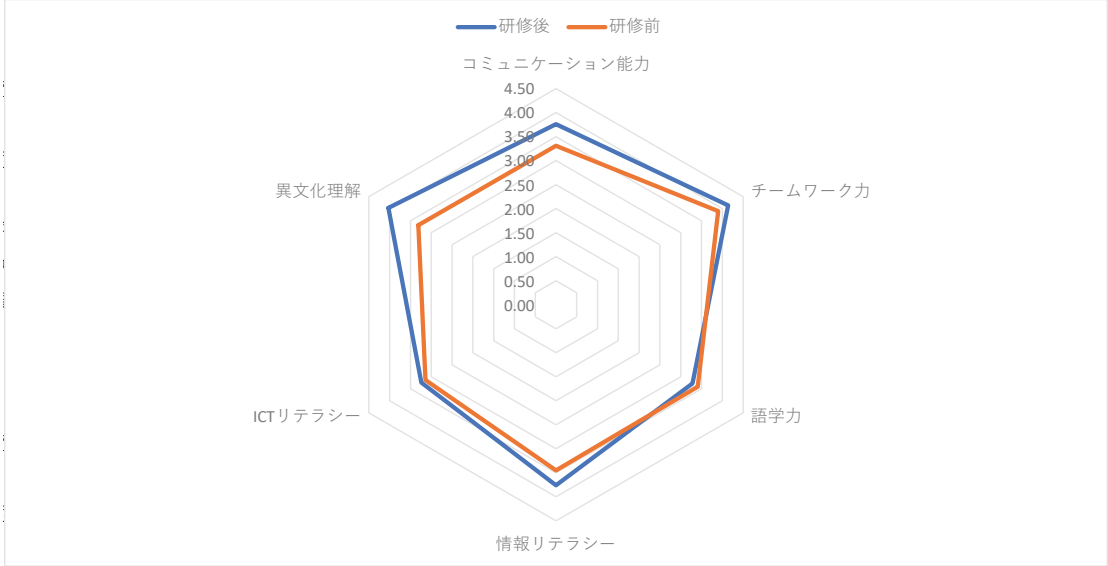

図 5　自己評価の推移（点）n=29

表 1　自己評価得点

設問	研修前			研修後			
	平均	標準偏差	中央値	平均	標準偏差	中央値	p値
1_コミュニケーション能力	3.31	1.004	4.00	3.76	0.872	4.00	0.026
2_協働する力_チームワーク力	3.90	0.900	4.00	4.14	0.875	4.00	0.106
3_語学力	3.41	1.181	3.00	3.28	0.841	3.00	0.458
4_情報リテラシー	3.45	0.985	4.00	3.76	1.023	4.00	0.116
5_ICTリテラシー	3.14	0.990	3.00	3.24	0.951	3.00	0.430
6_異文化理解と適応力	3.31	0.806	3.00	4.03	0.778	4.00	0.001

（逆転項目なし）した上，その平均点を研修前後で比較したものが図 6 となる。なお表 2 には検定の結果を p 値として示した（網掛け部分は $p < .05$）。

多くの項目で研修後に平均得点の上昇がみられる。これは研修先に対するポジティブイメージが形成された結果として考えてよい。特に，「国土が広い」（平均点＋0.6），「幸福度が高い」（平均点＋0.3），「自然が豊か」（平均点＋0.2），「人々が優しい」（平均点＋0.2），「歴史的に興味深い」（平均点＋0.3）の 5 項目については研修前後の変化は顕著で，総じて良い方向への変化だったことがわかる。これは研修プログラムの効果として考えることができ，やはり短期研修の場合，語学力を高めることを目的化するのではなく，異文化理解にシフトしたほうが，参加学生は効果を実感できるものと考えられる。

検定で有意差はないものの，「交通機関が発達している」（平均点－0.3）「食事がおいしい」（平均点－0.1）の 2 項目は研修後に平均点がやや下がっている。研修後のアンケートで「困ったこと」を自由記述で尋ねたところ「バスが時間通りにこなかった」「バス内にバス停案内をする画面表示が無いので，スマホで確認する必要がある。」などがすべての研修先で書き込まれていた。また，食事については統計的有意差はないものの，ニュージーランドが研修先の学生から「朝ごはんとランチがいつも同じだったこと（トーストサン

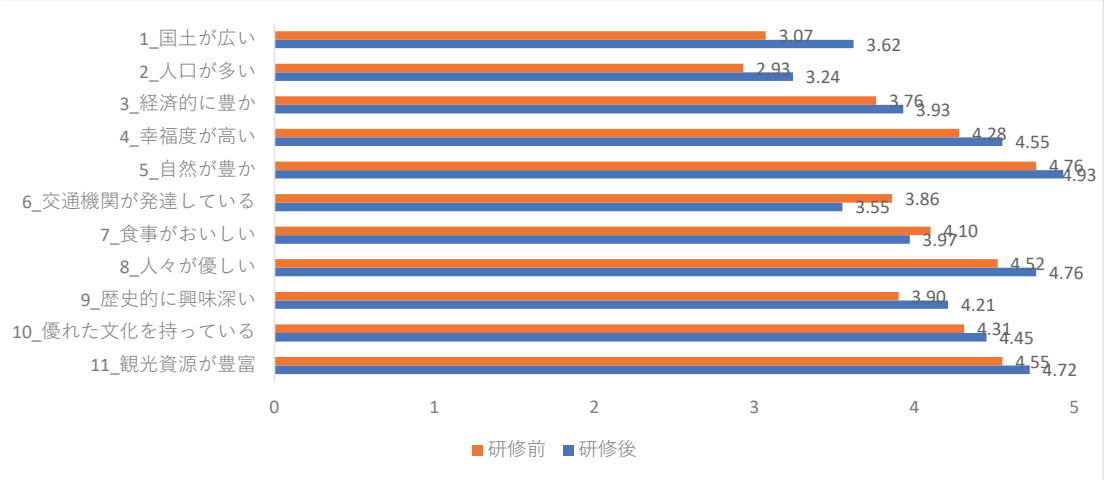

図 6　研修先のイメージの推移（点）n=29

表 2　研修先のイメージ得点

設問	研修前			研修後			
	平均	標準偏差	中央値	平均	標準偏差	中央値	p値
1_国土が広い	3.07	1.252	3.00	3.62	1.208	4.00	0.006
2_人口が多い	2.93	0.998	3.00	3.24	1.185	3.00	0.099
3_経済的に豊か	3.76	0.830	4.00	3.93	0.842	4.00	0.358
4_幸福度が高い	4.28	0.649	4.00	4.55	0.686	5.00	0.033
5_自然が豊か	4.76	0.435	5.00	4.93	0.258	5.00	0.025
6_交通機関が発達している	3.86	0.743	4.00	3.55	1.152	4.00	0.269
7_食事がおいしい	4.10	0.673	4.00	3.97	0.906	4.00	0.360
8_人々が優しい	4.52	0.574	5.00	4.76	0.435	5.00	0.020
9_歴史的に興味深い	3.90	0.939	4.00	4.21	0.819	4.00	0.039
10_優れた文化を持っている	4.31	0.806	5.00	4.45	0.783	5.00	0.305
11_観光資源が豊富	4.55	0.632	5.00	4.72	0.649	5.00	0.212

ド，クッキー，りんごなど)。もう少し野菜を食べたかった。」「とても甘いか，とてもしょっぱいか，とても辛いか，食事の味が極端だった。」「食が合わず，胃もたれした。」の 3 件のコメントがあり，ややニュージーランドで食の不適合を感じる傾向がみられた。

ホストのホスピタリティを確認するため，過去に学生が書いた研修記録を参照しながら，ホストに期待すること，ホストにしてもらって嬉しかった，もしくは理想的と期待していたことを 11 項目検討し，それらを「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の 5 段階で評価してもらった結果を得点化（逆転項目なし）し，平均点を研修前後で比較したものが図 7 となる。表 3 には検定の結果を p 値として示した（網掛け部分は $p < .05$）。なお，研修前は「期待」，研修後は「実態」を問えるように，設問内容を期待から実態へと切り替えている。

結果として，多くの項目で微減しており，期待と実態がやや異なっていたことが見てとれる。子どもやペットがいる方がいいと期待していたものの，実際に行ってみたらいないというようなもの

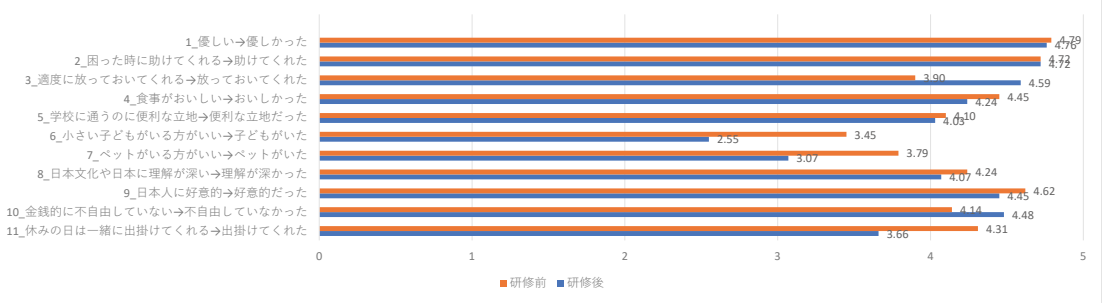

図 7　ホストへの期待と実態（点）n=29

表 3　ホストへの期待と実態得点

設問	事前			事後			
	平均	標準偏差	中央値	平均	標準偏差	中央値	p値
1_優しい→優しかった	4.79	0.412	5.00	4.76	0.435	5.00	0.705
2_困った時に助けてくれる→助けてくれた	4.72	0.455	5.00	4.72	0.455	5.00	1.000
3_適度に放っておいてくれる→放っておいてくれた	3.90	0.860	4.00	4.59	0.628	5.00	0.000
4_食事がおいしい→おいしかった	4.45	0.632	5.00	4.24	0.872	4.00	0.244
5_学校に通うのに便利な立地→便利な立地だった	4.10	1.012	4.00	4.03	1.267	5.00	0.709
6_小さい子どもがいる方がいい→子どもがいた	3.45	1.352	3.00	2.55	1.723	2.00	0.008
7_ペットがいる方がいい→ペットがいた	3.79	1.236	4.00	3.07	1.981	4.00	0.019
8_日本文化や日本に理解が深い→理解が深かった	4.24	0.636	4.00	4.07	1.067	4.00	0.345
9_日本人に好意的→好意的だった	4.62	0.494	5.00	4.45	0.910	5.00	0.330
10_金銭的に不自由していない→不自由していなかった	4.14	0.789	4.00	4.48	0.949	5.00	0.159
11_休みの日は一緒に出掛けてくれる→出掛けてくれた	4.31	0.761	4.00	3.66	1.542	4.00	0.081

で，微減しているからといって全体的に期待が裏切られたという形で捉えることはできないので，注意が必要である。自由記述欄でもホストに対する不満を書き込んだのは，ステイ先を変更するトラブルに見舞われた 1 名のみで，あとは前掲の生活環境（寒さや食事）に関することが多かった。

注目したいのは，「適度に放っておいてもらう」という項目で，研修前後に平均点で＋0.7 ポイント増加している。この項目は，ホスピタリティ・マネジメントの考え方としての主客同一関係，すなわちホストファミリーがゲストとしての学生を対等として扱い，また学生側もそのように扱われたかどうかを確認するためのものである。もっとも，学生自身はプライバシーが確保されたかという観点で回答している可能性もあるが，実態として，手をかけられすぎるよりも，自分自身の時間が確保されていたりすることに，大きな意味を見出していることがわかる。研修後に，「（ホストに）適度に放っておいてもらった」と感じる学生は，研修先のイメージとして「人々を優しいと感じ」た傾向が強く出ていた（カイ二乗検定 $p < .001$）。よって，本調査において，ホストのホスピタリティとして重要なのは，構われすぎることではなく，「適度に放っておいてもらう」ことにあり，ホスピタリティ概念に見られる主人と客人の対等な関係を前提とするそうした「主客同一関係」が成り立ち，実際に当該国・地域の人々が優しいという，人々に対して優しいイメージが形成されることが見出された。

まとめと今後の展望

今回行ったアンケート調査結果をまとめると以下のようになる。

1，研修の効果（自己評価）の把握

①評価が高いのは「コミュニケーション能力」「異文化理解」。

②「語学力」については検定で有意差はないものの，やや下落傾向。

2，研修参加国・地域に対するイメージの研究 参加前後における変遷の把握

①研修後には，研修先に対するポジティブなイメージが形成されており，「国土が広い」，「幸福度が高い」，「自然が豊か」，「人々が優しい」，「歴史的に興味深い」は顕著な変化が見られた。

3，参加学生が持つホストへの期待値と実態

①ホストへの期待と実態の差が良い方向に大きいのは「適度に放っておいてもらう」。

②その他の項目については，やや期待通りにいかなかった学生の方が多いものの，大きな不平・不満につながるようなことはないことが自由記述欄からはうかがえる。

③ホストとの関係性として「（ホストに）適度に放っておいてもらった」と感じる学生ほど，研修先の「人々を優しい」と感じる傾向にある。

本調査において，研修参加学生が感じるホストのホスピタリティは，「適度に放っておいてもらうこと」にあるが，これはホストから丁重に客として扱われることを望むのではなく，対等の関係，すなわち主客同一関係を望んだ結果とみることができる。このような関係性は，当該国全体へのイメージとして波及し，「人々が優しい」と評価するようになることがわかった。しかし，それが学修にどのような影響を与えるかについては，更に追跡調査を必要とするため，今後の研究課題としたい。

参考文献

上田恒雄，2021, 短期海外語学研修の効果―言語的側面に見られる変化―，人間文化研究所紀要第 36 号 , 228-238

後藤田遊子，2012, 学生の振り返りから見えてくる海外研修の現状と課題，北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第 5 号 , 283-290

鹿浦佳子，2008, ホームステイする学生は成績がいい！　ホームステイをすると成績が上がる？‘関西外国語大学留学生別科日本語教育論集第 18 巻，99-134

服部勝人，2008,『ホスピタリティ・マネジメント入門』，丸善出版

日高陵好，看護学生を対象とする海外短期研修の評価と成果，県立広島大学保健福祉学部誌人間と科学 17 号，95-106

松田康子，2012, 短期海外研修の成果と意義―学生の報告書とアンケート調査の結果から―‘名古屋文理大学紀要第 12 号，11-16

森越京子・白鳥金吾，2016, 観光ホスピタリティ教育第 9 号，3-14

《注》

(1) 江戸川大学公式 Web サイト　海外研修体験レポートより転載
https://www.edogawa-u.ac.jp/zaigakusei/kensyu/NZ1_report/index5.html